

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 21 年度派遣報告書

—ラオス・ラオス国立大学, ラオス語, H21. 11. 1-H22. 3. 16 —

平成21年度入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程1回生
黒沢陽太郎

自身の研究テーマについて

本研究は,ラオス・ルアンパバーン世界遺産地区内の音を視点にし,研究地域社会の特性,社会変動を明らかにするものである。

当該地域は,ラオス人民共和国の前身であるラーンサーン王国,ルアンパバーン王国の王都である。1995年,UNESCO から街の中央地区全体が世界遺産として選定されている。

地域内の音と言っても様々である。主にラオス正月において演奏される民謡,カップ・トゥン・ルアンパバーンをはじめとする,低地ラオ族による民族音楽。遺産地域内に 34 ある寺院の音。これには,毎日打ち鳴らされる鐘や木鐸,特別な日,祭りの際に使われる銅鑼,月曆に基づき叩かれる太鼓や鉦などが挙げられる。これらは全てが地域住民と僧の関係の中で,意味を持つ音である。加えて,世界遺産選定により増加したトゥクトゥクや,ゲストハウス建設の為に生じる騒音も近年問題とされている。

また,市街地近郊には低地ラオ族の他にも,移住してきた山腹ラオ族,高地ラオ族が住む。そのそれぞれが,各々の音楽を持っている。たとえば,高地ラオ族であるモン族の,モン語に直訳できるメロディで演奏される笙音楽や,モン正月の歌がけなど。

本研究は,これら世界遺産地区内の音を調査することにより,地域内の音環境の現状と問題,社会動態を明らかにするものである。

研究言語の概要

ラオス語は,多民族国家ラオスにおける公用語である。声調言語であり,無気音,有気音の存在,ラオ文字で表されるなどの特徴が挙げられる。そもそもは低地ラオ族の言語であるが,小学校などの教育機関においてラオス語教育がなされ,現在では年齢層での違いはあるにせよ,国内ではどの民族も各々の言語と,ラオス語を使用する。また,方言差もあり,北部,中部,南部で発音の違いや語彙の違いも存在する。

語学研修の内容について

①11月から12月下旬までは,週4回,3時間ずつの講義。途中で2週間半,モン正月と国際正月(ピーマイ・サーコン)の時間をルアンパバーンで過ごした以降は,②週3回,2時間ずつの講義を受けた。①を前半,②を後半として述べる。

前半期には,国立大の教科書を使い,ラオス語の基礎から会話までを学んだ。学び始めた当初は,まずラ

オス文字に慣れることに時間を要した。また、発音や声調を正しく使わなければ、違う語彙になってしまうということからも、それに留意する必要があった。

ラオス語の文法は難解なものではないので、初期においては、前記の二点を重視し、講義を進めた。その後、会話形式の教科書を使っての講義になったのだが、この頃になると先生の話す速度も増し、ついていけなくなることもしばしばであった。しかし、徐々にではあるが、聞き取れるが意味を知らない単語と、学習した単語の区別がつくようになってきた。

後半期には、自身の調査に必要である言葉や文化、社会背景の講義となった。教えてくださったラオス語学科の先生が民族音楽や、寺の文化について興味を持っている方であったことも幸いした。ラオス語習得と共に、講義の中でラオス人から語られる文化を聞くことができたのは収穫であった。

研修期間中に印象に残った体験や経験

12月、ルアンパバーン市街地近郊にてモン族の正月(noj peb caug)に参加したことが挙げられる。ラオスは多民族国家であるので、正月祭りが年内にいくつも行われる。最も盛大なものは4月中旬のピーマイであるが、モン族のものはおよそ11月から12月にかけて2週間程、国内各地で行われる。時期に幅があるのは、毎年米の収穫時期が少しずつ異なるからである。

モン族の正月は新年の祝いと共に、男女の出会い、求婚の時期でもある。未婚の男女が伝統衣装に身を包み、向かい合ってボールを投げあう。その時、喉に自信のある者は歌で相手への愛を表す(hais kwv txhij)。両者が歌う場合、歌がけになり、常に即興で言葉を変え、それは途切れることがない。私が撮影、録音した中で一番長かったケースでは、お互いが3時間以上朗々と歌い続けていた。そのような音が、営々と受け継がれているのを目の当たりにすることができたのは、ラオスの音文化の多様性を目の当たりにする良い機会となった。

目標の達成度や反省点について

今回の研修中に、ラオスでの日常生活を送るに若くはない程度の習得はできたと考える。しかし、会話の内容が専門的になる場面、また、手続きなどの重要な場面においては、やはり全てを理解することができず、会話が後手に回り、得たい情報をすぐに得ることができなかったと言える。これは、今後ラオスで調査する際の大きな課題となる。

また、滞在の最後の時期でも、母音の発音が不明瞭になる、声調を間違え、違う単語と受け取られるなどの事が起こった。その為、今後より多くの語彙を習得し、一層の聞き取りと、話す訓練が必要である。

しかし、昨夏の調査と比較し、ラオス語を使うと相手の反応がまるで違うことも実感できた。これは、今後の調査に向けての大きな収穫であると言える。



[写真1] ラオス国立大学
文学部にて



[写真2] ビエンチャン
凱旋門



[写真3] ルアンパバーンにて
モン族正月